

# Card Magic Library

第4卷

加藤英夫 著

## 序 文

セカンドディールが難しい技法であると思っていたとしたら、これほど損な勘違いはないでしょう。たしかに‘デッドサムメソッド’と呼ばれる、まったく左親指を動かしたように見えないやり方は、ものすごく難しそうに見えます。ですから、ジャグリング的なエンタテインメントである、ギャンブルデモンストレーションにおけるセカンドディールとして、観客を感心させるのに効果的なやり方です。

このやり方をマスターしなければいけないとしたら、セカンドディールを敬遠する気持ちはわかります。しかしながら、デッドサムメソッドはマジックには使いません。左親指を動かさないように見えるやり方は、マジックには使えないのです。マジックに使うセカンドディールでは、左親指を動かすのが見えなければ不自然なのです。

ギャンブルデモンストレーションでは、指先に観客の注目を集めて、“いかに難しいことをやっているか”を観客に納得させることが目的です。しかしながら、マジックにおけるセカンドディールは、“いかに何もやっていないか”を感じさせることが目的です。

“コンプリートウォルトン”（1981年）において、ロイ・ウォルトンはつぎのように言っています。

セカンドディールは、2枚目をうまく取るというテクニックの完璧さよりも、自然にカードをディールしているという見かけの方が、観客の目を欺くのです。

スポットライトがマジシャンに当たっているのを想像してください。もしもスポットライトが手先だけに当たっているとしたら、2枚目を取る部分が完璧でなければなりません。しかしながらマジックの演技においては、スポットライトは体全体に当たっているのです。ですから手先だけの動きが怪しくないことよりも、動作全体が怪しく見えない方が重要なのです。

マジシャンは、スポットライトによって観客の視線の焦点をコントロールするのではなく、自分の演技によってコントロールします。視線をコントロールするのは演技だけではありません。現象自体が視線をコントロールすることもあるのです。アレックス・エルムズレイは、“コレクテッドワークスオブアレックス・エルムズレイ第1巻”（1991年）の‘ストレンジストーリー’という作品の後書で、つぎのように述べています。

優れたマジックというものは、現象と方法の調和から生まれるものだと、私には思えます。方法が現象を生み出すわけですが、現象が方法の怪しさを打ち消すこともあるのです。

私のセカンドディールはたいしたことはありません。ですからセカンドディールを使うトリックではすべて、テーブルに置くカードの方に観客の注目が集めるように配慮して組み立ててきました。そのことが、デッキを持つ左手を意識させない働きをするのです。

ですからこのトリックでは、表向きにテーブルにディールして、見せられるカードが何のカードであるか意味のあるものとしています。したがってこのトリックは、現象と方法の調和から得られる利益というものを示す、典型的な好例であるのです。

たとえ表向きにディールしなくても、カードを取ってテーブルに置く右手の動作に注目を集めることはできます。セカンドディールにおいて、主役はカードをディールする右手なのです。せっかく右手に注目を集めたいのに、左手が怪しい動作をやってはいけません。2枚目のカードをうまく取るというストライクの部分に気を使いすぎると、全体の動作がぎこちなくなります。

一言で言うとしたら、観客から見たセカンドディールとは、‘カードを取る動作’ではなく、‘カードを置く動作’なのです。

つぎに過激なことを書きますので、驚かないでください。

多くの著者が、“セカンドディールは、ふだんカードをディールするときと同じ見かけになるようにやることが重要であり、デッキを傾けて持つビベルや、両手を大きく動かすスウィングは不自然だ”と言います。この考え方が間違いの出発点です。

そういう考え方は、ギャンブルにおけるディールに束縛されています。たしかにギャンブルにおいては、ふだんと違うディールのやり方をしたら、それだけで怪しまれます。しかしながらマジシャンは、プレイヤーにカードを配るのではなく、演じているマジックの脈絡の中で、カードをディールするのです。

Mr.マリックはあるテレビ番組で、ほとんどデッキを垂直にしてセカンドディールして、カードをフォースしていました。これを従来からの常識に束縛されている人が見たら、とんでもないやり方だと思うでしょう。私はこのやり方を見て感動しました。カードの

フェースが見えるように置いていった方が、カードを自由に選んだ感じが強まるのです。

ギャンブルデモンストレーションのセカンドディールを見て、自分にはできないとあきらめていた方は、当書によって、それが大きな勘違いであったことがわかるはずです。フランス・カーライルは、“トップカードのずらし方を小さくすることに気を使うことはない。右手のタイミングが正しければ、ずらし方がかなり大きくても右手の陰に隠れて見えないのだから”とさえ言っています。

そしてもういちどウォルトンの言葉をお届けいたしましょう。やはり“コンプリートウォルトン”からの引用です。

“使い道が限られているから、セカンドディールなんて練習する価値がないよ”などと言う友人の言葉を真に受けてはいけません。セカンドディールは、たいへんパワフルな効力を持つ技法でありながら、幅広く使われてきませんでした。それは、多くの人が使い道がないと思って、手をつけてこなかったからにすぎません。

セカンドディールは‘できない技法’ではなく、‘できないと思われ続けてきた技法’なのです。いったん、この心の壁が取り去られたとき、あなたの目の前に、広い素晴らしい世界が開けます。さあカードを手にして、私の説明を聞いてください。

このウォルトンの言葉こそ、私がこの第4巻でセカンドディールについてまとめようとした動機です。日本でセカンドディールを使ったマジックがあまり紹介されてこなかったのは、もしかすると多くの著者たちが、セカンドディールが難しい技法だと思い込んでいたからかもしれません。

セカンドディールが有効な技法だと知っていたマジシャンたちは、多くの作品を作ってきました。今回パソコンを使用してセカンドディール使用作品をリストアップしたところ、117種類リストアップされました。これは、ダブルリフトやエルムズレイカウト使用作品のときよりも多かったぐらいです。

それらが時代の中で現れてきたことを明確に理解していただくために、今回の作品収録順は、発表された年代順といたしました。ウォルトンが指摘したとおり、セカンドディールをマスターすれば、素晴らしい世界があなたを待っています。

2009年3月1日

加藤英夫